

第17回益城町人権フェスティバル

益城町から人権の熱と光を

1月25日(土)
町文化会館

益城中央小の発表

益城中央小は水俣病の「原因は何か」「なぜ起こってしまったのか」「どんな被害があったのか」を自ら学び、語り部さんに伝えてもらった「願い」や「思い」を発表しました。

木山中は「はるかのかのひまわり絆プロジェクト」に参加し、震災学習や命の大切さの学習に取り組んだ成果を劇で発表。震災後、人々が生きる気力を取り戻し、強い絆で結ばれていった様子を伝えました。

広安小は修学旅行で長崎に行き、戦争や原爆がどれほど多くの人たちの幸せを奪ったのか、苦しめることになるのかを学び、平和の尊さ、人権を守っていくことの大切さを構成詩として発表しました。

ステージ発表で津森小は、原爆の大きな被害や戦争のおそろしさを劇で伝えてくれました。平和学習の中で考えたことを「命を大切に、平和な世の中にするために自分たちにできること」として訴えました。

飯野小は「みんながなかよく、笑顔があふれる学校」にするためにできることを「飯野っ子総会」で話し合っ考えたこと「みんなで考え」と「各学年で発表」しました。

広安西小は益城町について学習する中で、各家庭での仕事や、農業・工業・商業を学び、たくさんの人と出会いました。そこから自分の生活と重なっていること、お互いが支え合っていることに気づいていった学習成果を発表しました。

人権擁護委員の発表、平田舞踊教室の日本舞踊や落語家桂ぼんぼ娘さんの人権落語など、人権について改めて考えた一日でした。参加者から「人権への思いが深められた」や「子どもたちが生きていて良かった」と思える社会にしたいなどの感想がありました。人権を守るため「益城町から人権の熱と光を」を愛言葉に、私たち一人一人にできることから始めていきたいと思います。

益城中は人権学習で学んだ「ふたりのタロウ」を劇化し、差別のおかしさと、差別をなくしていくために、一人一人が自分の生活と重ね、自分のことと考え、自らの行動が大切であることを伝えました。

益城町教育委員

ふるさとの
地名漫歩

歴史の変遷と地名

367

飯田山常楽寺⑦

益城町の中世の宗教圏は常楽寺圏と福田寺圏に二分され、砥川に常楽寺末寺と目される重福寺跡があり五楽に常楽寺圏東端を示唆する東宮の微小地名があるので常楽寺圏はここまでとされます。

赤井城跡には福田寺の石造物に酷似の薬研彫りの建久2年在銘の石造物があり、福田寺系の末寺と推測され、「御登り」の地名は赤井寺(仮称)の聖域に参詣する福田寺の修験僧が敬称の「御」を付けた通路であり、木崎・赤井以東と木山川周辺の広安・木山・津森は福田寺圏に入ります。役場前の道路が第二空港線に交差する付近に「遠見塚」「船面」の地名があります。この地名は31年間の「地名漫歩」研究の中で未解決でしたが、ある学者の御教示により氷解しました。

ここからは南に城山・朝来山・袴野の権現山が正面に遠望され、ここに古人は城山を御顔に朝来山の東の稜線を胸に頂上を腹に西の稜線を腰から足爪先を権現山と「釈迦の涅槃像」に見立て遠見塚、船面か

ら涅槃像を拝んだと思われる、これは福田寺圏信徒の信仰を示す宗教地名と考えられます。

この地名から40年前、県文化課の一研究者が幻の古墳として調査されたが発見できず、ただ畑から土器の破片等が発見されるので古代人の生活遺跡は長い開拓の中で破壊されたと思われます。ここに端無くも福田寺信仰の地名から阿蘇五岳より小さいが「益城の涅槃像」が発見復活しました。「益城涅槃像遠望地」くらいの看板を立てるなど大切にしたいものです。ふるさとの地名と歴史の解明には限りがありません。

益城町文化財を訪ねる会
会長 松野國策



木山の遠見塚から望む益城涅槃像